

保育現場における野鳥とかかわる活動への取り組みと意識

高木 義栄

Attempts and consciousness to activity concerned with wild birds in preschools (nursery schools and kindergartens)

Yoshihide Takaki

Abstract

As the results of questionnaire survey to 28 preschools, it was found that they think the relation with wild birds and children is necessary but an activity concerned with wild birds directly was hardly carried out. The reasons for this are the difficulty of associating with wild birds directly and the deep-rooted concern to avian influenza. The influences of avian influenza were also shown by stopping the raising of the bird at all 28 preschools and there being some preschools which removed the nest of the swallow by the request of the guardians. It is thought that the difficulty of associating with wild birds directly can be solved by the monitoring of the bird table with a network camera and/or the fixed point observation using a spotting scope in the shade for bird-watching. Because it is supposed lack of the knowledge or the misunderstanding for an infection course and the way of the infection by the staffs of preschools and guardians, it is necessary to publicize right knowledge for the infection of avian influenza while considering the safety of children.

Key words: questionnaire survey, activity concerned with wild birds, relation with wild birds and children, avian influenza, monitoring of the bird table with a network camera

はじめに

幼児期の環境教育の中心は自然体験であり、幼稚園教育要領の「環境」領域では、「幼児期において自然の持つ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができる工夫をすること」が示されている¹⁾。

様々な自然のうち、生物は自然に親しむ保育を実践する上で大きなウェイトを占めている。昆虫をはじめとする“むし”やザリガニなどの水生生物を対象にした捕獲、ウサギやカメなどの哺乳類・爬虫類の飼育、ドングリや果実・落ち葉の採集、サツマイモ・アサガオなどの栽培が実践例として教科書で取り上げられ²⁾、保育現場でも実施されていることが多い。一方で自然の1つである野鳥が取り上げられることは少なく、「環境」領域に関する教科書では飼育を除き、ほとんど扱われていない^{2),3)}。

野鳥は、比較による発見を導きやすい多様性（形態や行動など）や幼児の感受性を刺激する色彩の豊かさといった環境教育的に適した特徴を備えている。また、親が子の世話をうるので育雛の観察を通して情操教育にも利用できる。このような好適な材料の利用は、幼児教育において子供たちに有益な効果をもたらすと思われる。筆者は、2012年から2013年にかけて近畿大学九州短期大学周辺地域の鳥相調査を行い、調査地周辺が豊かな鳥相を有していることを示した^{4),5)}。近畿大学九州短期大学周辺地域の自然環境は他の筑豊地区と似通っているので、筑豊地区全域が豊かな鳥相を保有していることが予測される。したがって、筑豊地区では自然に親しむ保育の一環として野鳥とかかわる行動が実施しやすいと考えられる。

そこで、筑豊地区における保育現場での野鳥とかかわる行動の実態とその活動に対する意識を把握するためアンケート調査を実施した。

方法

2013年の6月から12月にかけて、飯塚市の18園（保育所10、幼稚園8）と嘉麻市及び嘉穂郡の10園（保育所7、幼稚園3）に対して電話あるいは直接出向いてアンケート調査を行った。各園での野鳥とかかわる活動への取り組みと意識を確認する5項目と園の周辺環境に関する1項目の計6項目（表1）について質問し、すべての園から回答が得られた。

アンケートの項目1と5については「いいえ」と答えた理由を、項目2については「はい」と答えた場合のみ具体的な活動内容を、項目3については「はい」と答えた場合は飼育している鳥の種類や子供たちの関わり方を、項目4では「はい」と答えた場合に巣の観察の有無を追加で質問し、野鳥とかかわる活動の状況や意識がより鮮明に把握できるようにした。またそれぞれの項目について、回答に関連する事柄や現場での状況についてのコメントも記録した。

なお、本研究における“野鳥とかかわる活動”とは、視覚的・聴覚的に直接体験する活動をメインに想定しており、野鳥を直に触る触覚的体験に限定したものではない。

結果と考察

◆野鳥と子供たちとのかかわりの必要性

「野鳥と子供たちとの関わりは必要だと思いますか？」という問い合わせに対して、28園中26園が「はい」と答え（図1）、ほとんどの園が野鳥と子供たちとのかかわりは必要なものであると認識していることがわかった。「いいえ」と答えた理由については、「特に野鳥だけをピックアップする必要はない」・「鳥インフルエンザが心配」といった理由が挙げられた。前者の場合、野鳥とのかかわりを否定するわけではなく、野鳥を特別扱いしないとのことであった。後者の理由は項目1の質問が“直接野鳥に触る”という意図でなされたと解釈されたためで、質問文に問題があったと思われる。

また、「はい」と答えた園のうち、条件付きだったらという回答があった（2園）。その

理由の1つは、「カラスのいたずらに悩まされているので野鳥の種類による」というものであった。確かに、野鳥の中には人間に危害を加える可能性がある種類もいるので、かかわる種類には注意を払う必要がある。残るもう1つの理由は、「直接触れるといった行為は、鳥インフルエンザのことを考えるところないので見る程度なら良い」というもので、再び鳥インフルエンザへの懸念が示された。

◆保育現場での実施状況

「野鳥とかかわるような活動を実施していますか?」との問い合わせに対しては、28園中22園が「いいえ」と答え(図1)、野鳥と子供たちとのかかわりは必要という意識とのギャップが見られた。各園での話をまとめると、野鳥とかかわる活動をしていない理由は、1. 野鳥に関する知識(種名など)を職員が持っていない、2. 野鳥とかかわるのが難しい(特に直接的なかかわりの場合)、3. 鳥インフルエンザへの懸念、の3点に要約された。ここでも鳥インフルエンザの影響が示された。

また、「はい」と答えた園のうち半数ほどは、絵本や紙芝居などの間接的なかかわりのみを行っていた。残りの園でも、「音に着目した自然体験の一つに野鳥が含まれる」といった野鳥に限定していない活動や「散歩中や園庭に野鳥がいれば観察して話をする」といった偶発的なもので、本アンケートでメインに想定していた“野鳥に狙いを定めた直接的なかかわりを持つ活動”は1園しか実施していなかった。

◆鳥の飼育

「園で鳥の飼育をしていますか?」との問い合わせに対し、すべての園が「いいえ」と答えた(図1)。ほとんどの園が、以前は飼育していたが止めており現在も控えていた。その理由は共通して鳥インフルエンザへの懸念によるもので、役所からの通達や保護者からの要請により飼育が難しい状況にあるとのことだった。ある園の方からは、「伝染性の疾病への配慮から鳥以外の飼育も難しくなった」という回答も出された。安全性という観点から、自然体験の手段としての飼育の在り方を見直す時期がきているのかもしれない。

◆身近にいる野鳥としてのツバメ

スズメやハト・カラスと同様、ツバメは都市部でよく見かける野鳥で、巣巣および育雛を身近で見ることができる^⑨。場合によっては園内でも巣巣することがあり、巣巣過程や子育ての様子を観察できる可能性がある。極めて身近で見られ、人に対する警戒心も他の野鳥より低いので、自然体験の一環として環境的保育活動への導入がしやすいと思われる。

「園内にツバメの巣はありますか?」という問い合わせに対して、約4割にあたる11園で「はい」との回答が得られた(図1)。しかしその11園中、ツバメの巣を観察すると答えた園は約半数にとどまり、ツバメの巣があっても必ずしも教育的な利用はしていない結果となった。ある園の回答に「鳥インフルエンザを心配する保護者がいて撤去する」というもの

があり、鳥インフルエンザへの懸念が根強いことが示された。「巣の観察をするか？」の問い合わせに対して「いいえ」と答えた場合の理由を書く項目を設けていなかったので推測になるが、他の園でも似た理由によって観察していない可能性が高い。

◆野鳥とかかわる有効な方法

「野鳥と関わる有効な方法があるとしたら利用しますか？」に対しては、8割以上にあたる23園が「はい」と回答した（図1）。これらの肯定的な回答の中には、「検討する価値はある」（2園）、「安全面から園内では難しい」・「鳥インフルエンザ感染の恐れがあると難しい」（2園）といった条件付きの肯定も含まれていた。否定的な回答の理由としては、「園の方針によるので何とも言えない」・「他にやるべきことが多い」といったものであった。なお、「どちらとも言えない」とした園が1つあった。

園の方針や個人的見解にも左右されるが、概ね肯定的な回答が得られた。一方、野鳥とかかわる活動を実施している園は少なかった（図1）。これらの点を考え合わせると、野鳥とかかわる上で技術的な困難さが存在していると推測される。一部の種を除いて、野鳥の人に対する警戒心はかなり強く、野鳥調査に慣れた研究者でもじっくり観察することは難しい。ある程度離れたところから観察していても、ちょっと手を動かしただけで飛び去ってしまう場合もある。よって、何らかの手段がないと子供たちが直接的なかかわりをもつことは不可能だろう。また、ここでも鳥インフルエンザへの懸念が示された。園側に子供たちの安全面に配慮する必要がある以上、仕方がないことかもしれない。

◆アンケート対象園周辺の自然環境

質問項目6の6つの自然環境のうち、3つ以上あると回答した園がほとんどで、2つ以下だったのは4園のみだった。特に“雑木林”については全ての園が近くにあると回答した。次いで“田んぼ”、“森”と“川”の順に多く、“原っぱ”が一番少ない結果となった。項目6に挙げた自然環境は、複数の野鳥が生息あるいは渡来する環境であり、野鳥とかかわる活動をする場合に適した環境である。

項目6の自然環境のうち、鳥相調査を行った近畿大学九州短期大学周辺には“池”を除いた5つがある。よって、今回のアンケート調査に回答していただいた園の多くは近畿大学九州短期大学と似通った自然環境にあると推測され、それらの園周辺の鳥相も同じく豊かであると考えられる。野鳥と直接的にかかわる活動は、身近な自然に対する興味関心を高めると同時に、観察を通じた発見する力の養成や幼児の感受性を育むといった効果が期待できる。今回のアンケート調査の結果を参考にしつつ研究を進め、野鳥の生息種数が多いと予測される環境を生かして野鳥と直接的にかかわる活動を実施する園が一つでも多くなるような提言をしたい。

まとめ

アンケートの結果から、保育現場では野鳥と子供たちとのかかわりの必要性を認識しつつも野鳥とかかわるような活動、特に直接的にかかわる活動は実施していないことが分かった。その理由としては、主に次の2点が挙げられる。第1に、野鳥の警戒心が強いこともあるって直接的な野鳥とのかかわりが難しいこと。第2に、鳥インフルエンザ感染に対する懸念が根強いことである。

第1の理由から簡便な野鳥観察の方法を確立することが求められるが、有効な野鳥観察の方法として次の2つを考えている。1つは、ネットワークカメラによるモニタリングである。まず、園舎などの建物の近くでかつ樹木のそばで人があまり近づかない場所に餌台を設置し（図2-a, 2-b）、餌を定期的に供給して餌台に慣れさせる。次いで、餌台及びその周辺に焦点を合わせてネットワークカメラを設置し、ルーターを介してパソコンに画像を送信するように設定する（図3）。パソコンにプロジェクターを接続してスクリーンに映像を投影することにより、野鳥に警戒されることなく多数の園児がライブで野鳥を観察できる。あるいは、窓に新聞紙などを貼って一部分にだけ観察できる隙間を空ければ肉眼での観察も可能である。この方法により、スズメやハトといった馴染みのある種に加えて、カワラヒワやホオジロ・シジュウカラなどの種子食の野鳥の観察が期待できる。また、餌に果実を用いれば果実食の野鳥も誘引できるだろう。同様の方法はツバメの巣の観察にも流用できる。

2つ目は、野鳥の採餌場所となっている開けた場所から適度に離れた場所にプロミナーを設置して観察する方法である。野鳥の警戒心の強さを考慮して、市販あるいは手作りの野鳥観察用ブラインド（周囲に生えている草で覆ったダンボールなど）の中にプロミナーを設置する。この方法では、毎回ほぼ決まった場所で採餌するサギ類やカモ類・カワセミなどの種⁵⁾の行動や形態が観察できる。プロミナーを使用するため活動は年長児に限定されるが、1つ目の方法では見ることができない種類を観察できるので、野鳥に対する関心をさらに高める効果が期待される。

鳥インフルエンザへの懸念については、園側に幼児の健康や生命を守る義務があるので仕方がないことと思われる。しかし、一方で鳥インフルエンザの感染に対する知識の欠如や誤解がコメントから感じられた。中でも、保育現場での野鳥と直接的にかかわる活動を妨げていると考えられるものが2つある。

第一に、すべての野鳥が鳥インフルエンザに感染する、あるいは感染していると園や保護者が考えていることである。確かに、日本での野鳥における鳥インフルエンザ感染は平成16年から断続的に観察されており、平成22～23年には15種60羽で感染が確認されている⁷⁾。一方、平成25～26年の糞便および死亡野鳥の調査では高病原性鳥インフルエンザウィルスは検出されておらず、低病原性ウィルスも定期糞便採取調査で11,999回の検査のうち27検体が検出されたのみである⁸⁾。また、環境省は感染リスクの高い種をリスク種として9目10科を選定しているが、猛禽類以外の陸鳥類（ハシブトガラスを除く）はリスク

種に含まれていない⁷⁾。これらのことから、少なくとも現状では鳥インフルエンザ、特に高病原性鳥インフルエンザに野鳥から感染する可能性は低く、ネットワークカメラを用いた野鳥とのかかわりでの感染確率はさらに低いと思われる。もっとも、感染確率が0%という状況はほぼあり得ないので注意を怠ることはできない。しかし、環境省による鳥インフルエンザウィルス保有状況調査は毎年行われており、その結果が環境省ホームページにて公開されているので、ホームページを定期的にチェックして感染状況が悪い年は活動を控えるようにすれば感染する可能性は限りなく0に近づけられる。

もう一つの誤解は、野鳥から人への鳥インフルエンザウィルスの感染について見受けられた。園側のコメントや保護者からの要請内容から、野鳥やその糞便が園内に存在するだけで感染するつまり鳥インフルエンザウィルスが空気感染すると考えているようであったが、それは間違いである。鳥インフルエンザウィルスでの空気感染の可能性は、否定できないが一般的に起きるとする科学的根拠はない⁹⁾。野鳥から人への感染は、感染した野鳥やその排泄物・死骸・臓器に濃厚に接触した際にまれに起きる場合があるだけである¹⁰⁾。つまり、羽や粉末状になった糞を吸い込んだり、野鳥やその糞便・死骸に素手で触れた上で手を洗わずに目や鼻・口などを触ったり、その手で食器や食べ物といった体内に接触するものに触るといった行為を、日常的あるいは継続的に行った場合に感染することがまれにあるという程度にすぎない。筆者が推奨している野鳥と直接的にかかわる活動において、そのような状況は飼育を除いて考えられないし、野鳥やその糞便に素手で触るような行為は活動に含めていない。それでも心配な場合は、餌台およびその周辺の清掃を定期的に行う、子供たちに野鳥やその糞便・死骸に素手で触らないかつ触った場合は必ず石鹼等で手を洗うよう厳しく指導することを心がければよい。また、飼育についても農林水産省や環境省が提示しているガイドライン^{11), 12)}を参考にすれば、鳥インフルエンザへの感染を有効的に防ぐことができるだろう。いずれにしろ、鳥インフルエンザに関する正しい知識を各園や保護者に向けて周知する努力が必要と考えられる。

参考文献

- (1) 文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領』フレーベル館
- (2) 田尻由美子・無藤隆編 (2006) 『保育内容 子どもと環境 - 基本と実践事例 - 』同文書院
- (3) 柴崎正行・若月芳浩編 (2009) 『最新保育講座9 保育内容「環境」』ミネルヴァ書房
- (4) 高木義栄・林幸治 (2012) 「近畿大学九州短期大学周辺の野鳥たち～幼児教育での身近な鳥相の利用に向けて～」『近畿大学九州短期大学紀要』第42号 51-65頁
- (5) 高木義栄・林幸治 (2013) 「近畿大学九州短期大学周辺の野鳥たち（2）～幼児教育における身近な鳥相の活用のすすめ～」『近畿大学九州短期大学紀要』第43号 39-56頁

- (6) 廉隅樓雄・松良俊明（1994）「京都市南部におけるツバメの営巣と集団ねぐらの観察」『京都教育大学環境教育研究年報』第2号 73 - 81 頁
- (7) 環境省自然環境局（2014）「野鳥における高病原性鳥インフルエンザに係る対応技術マニュアル」http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/manual/pref_0809/1_cover.pdf
- (8) 環境省自然環境局（2014）「平成25-26年シーズンの野鳥における鳥インフルエンザウイルス保有状況調査の結果について」
http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/attach/result20140924.pdf
- (9) 厚生労働省（2009）「事業所・職場における新型インフルエンザ対策ガイドライン」
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekakkaku-kansenshou04/pdf/090217keikaku-08.pdf>
- (10) 厚生労働省（2014）「鳥インフルエンザ（H5N1）について」
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekakkaku-kansenshou02/>
- (11) 農林水産省（2007）「高病原性鳥インフルエンザの発生を防止するために - 飼養衛生管理チェック表とポイント - 」
http://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/tori/pdf/ai_eisei_check1.pdf
- (12) 環境省（2004）「学校で飼育している鳥が死亡した場合の取り扱いについて」
http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/02.pdf

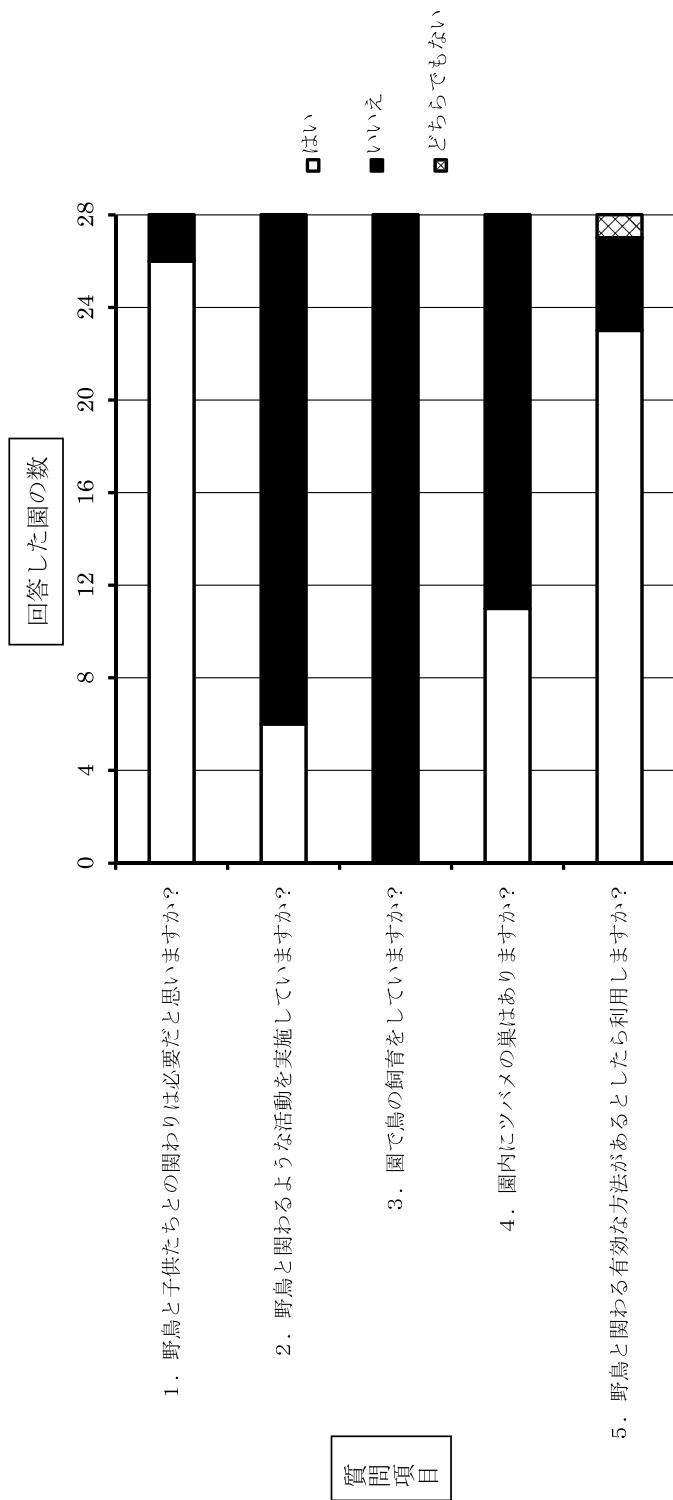


図1 「野鳥と子供たちとの関わり」についてのアンケートの結果



図 2-a 近畿大学九州短期大学附属幼稚園園舎前に設置した餌台



図 2-b 餌台上の様子

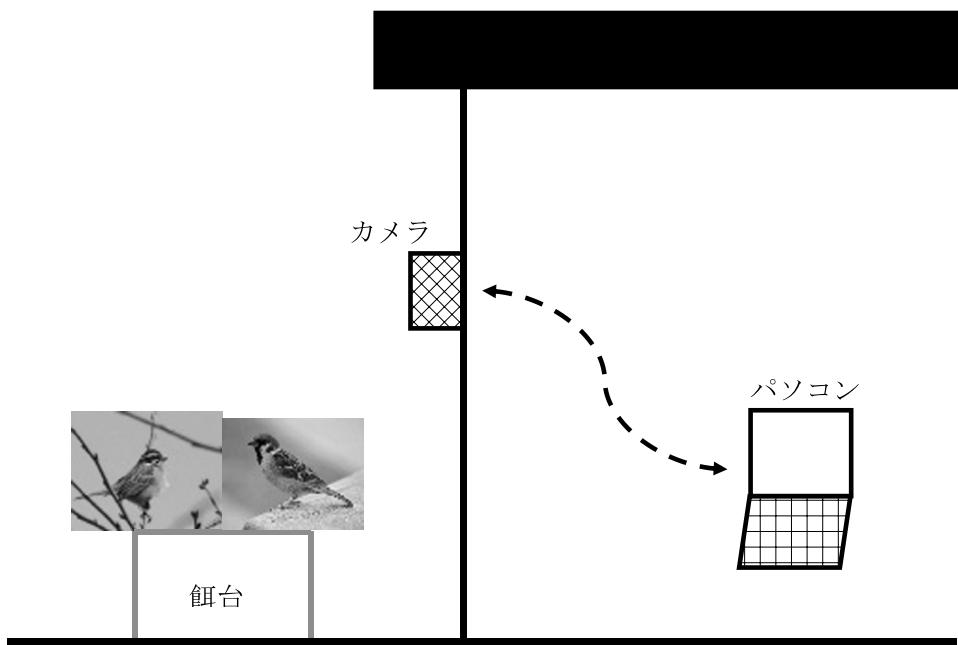


図3 ネットワークカメラによる餌台モニタリングの概念図

表1. アンケート「野鳥と子供たちとの関わり」の質問項目

1. 野鳥と子供たちとの関わりは必要だと思いますか？
1-2. 「いいえ」と答えた方：よろしければ理由をお聞かせください。
2. 貴園では、野鳥とかかわるような活動を実施していますか？
2-2. 「はい」と答えた方：具体的にどのような活動を実施していますか？
3. 貴園では、鳥の飼育をしていますか？
3-2. 「はい」と答えた方：何の鳥ですか？該当する鳥に○をしてください。 ニワトリ（ ）、ハト（ ）、インコ（ ）、文鳥（ ）、その他（種名： ）
3-3. その飼育に子供たちは関わっていますか？
4. 園内にツバメの巣がありますか？
4-2. 「はい」と答えた方：巣の様子を子供たちと観察することはありますか？
5. 野鳥（飼育しているものは除く）と関わる有効な方法があるとしたら利用しますか？
5-2. 「いいえ」と答えた方：よろしければ理由をお聞かせください。
6. 近くに以下の場所がありますか？該当するものに○をしてください。 森（ ）、雑木林（ ）、原っぱ（ ）、川（ ）、田んぼ（ ）、池（ ）